

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520107

研究課題名(和文)『暮らしの手帖』と花森安治の思想史研究 民主主義的主体性の視点を中心に

研究課題名(英文)Studies on "Kurashi no Techo" and Hanamori Yasuji

研究代表者

葛西 弘隆 (Kasai, Hirotaka)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：70328037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：雑誌『暮らしの手帖』の編集者として知られる花森安治(1911-1978)は、社会批評を手がける優れたジャーナリストかつ思想家でもあった。日常生活のなかにはたらく政治に着目し、食、衣裳、住居、職業など市民の生活に密着した多様な主題を扱うことをつうじて、戦争、国家、資本主義、公害といった同時代の社会問題にもつながる政治社会への関心を喚起した。花森の思想を、「暮らし」の概念をつうじて政治的なものと文化的なものを独自の形式で接合し、合理的で自律した政治的主体の確立を目指す民主主義実践として読むことができることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Hanamori Yasuji (1911-1978) is widely known as the founding chief editor of "Kurashi no Techo" (Notebook on Everyday Life), one of the major magazines published in postwar Japan. By focusing on the 'politics' working through everyday life of ordinary people and dealing with the various issues such as food, clothing, housing, jobs, etc., he connected those issues with the political-social problems such as the memory of war, the modern nation-state, contemporary capitalism, and the pollution. Hanamori's thought can be understood as the democratic practice in the postwar Japan aiming to construct the rational and autonomous political subject by articulating the political and the cultural.

研究分野：政治思想史

キーワード：日本 戦後 生活 日常性

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、戦時時期から戦後にまたがって活動し、文化的な領域をつうじて政治的なものの可能性に参与した言論人である花森安治に注目した。花森は雑誌『暮らしの手帖』の名編集者として一般に知られているが、政治思想史、日本思想史研究の分野においてはこれまでほとんど論じられてこなかった。

1948年創刊の『美しい暮らしの手帖』(1953年に『暮らしの手帖』に変更)は、服飾や食生活、栄養、衛生、デザイン、生活の合理化などを主題とし、長期にわたる「商品テスト」などの名物企画をつうじて多くの読者を獲得し、戦後日本の出版界で独自の地位を獲得してきた。花森は編集者として晩年までこの雑誌の企画運営に中心的役割を果たしていた。

本研究代表者は、花森の戦時時期から戦後にまたがる特異な経歴と、「暮らし」の概念を中心とする政治社会意識のありように着目し、一見すると政治とは無関係であるかのような文化的実践が、戦争の経験と記憶、ジェンダーへの独特の関心を媒介とする特異な民主主義実践であるという仮説をたてて、本研究に取り組むものである。

2. 研究の目的

第二次大戦期には大政翼賛会に関わり、戦後はデザイナー、編集者として言論・出版界で独自の地位を確立した花森安治の思想と、彼が中心となって創刊した雑誌『暮らしの手帖』を研究対象として、戦争中の戦時動員体制から戦後の民主主義思想への連続性、日常生活の美学的概念としての「暮らし」の民主主義的性格、戦争の記憶と日常性概念の関連、思想としての「暮らし」のジェンダー的性格について探究する。そして花森安治の思想と雑誌『暮らしの手帖』を、政治的なものと文化的なものを独自の形式で接合する民主主義実践として解釈することを目的とする。

3. 研究の方法

花森安治の思想の形成および変容を実証的に明らかにするために、以下の方法と課題を設定する。

- (1) 大正・昭和初期のモダン文化のもとで、とくに服飾や美学に関心を深めた幼少期(1911年生まれ)以来の花森の思想形成や、戦時の大政翼賛会での活動については資料が不足しており、いまだ十分な検証がなされていない。その点を考慮し、本研究の第一の課題とする。
- (2) 「民主主義と味噌汁」という彼の表現に

表現されているように、第二次世界大戦後の花森は、一般市民の日常生活のなかで無意識のうちにはたらく常識や感覚の政治的重要性を認識しており、人びとの無意識の領域にまで政治の言葉や論理が届かないかぎり、民主主義制度をはじめとするいかなる政治も真に人びと自らのものにはならないと論じていた。こうした政治観について、花森が大橋鎮子と創刊した『暮らしの手帖』を主たるテキストに、ハリー・ハルトゥーニアンが『近代による超克』で提起した「日常性」という視座から「暮らし」の概念構成を分析し、文化的なものと政治的なものの接合についての思想的解釈を提示する。

- (3) 花森は晩年(1960年代末以後)になると、戦争の経験や記憶にかかわる諸問題を『暮らしの手帖』の特集としてとりあげ、自らの現代社会への批判的視座をより明示的に問題提起しようと試みた(単行本としては、『暮らしの手帖』編『戦争中の暮らしの記録』、暮らしの手帖社、1968年、花森安治『一銭五厘の旗』、暮らしの手帖社、1970年)。高度経済成長を経たこの時期に、なぜ戦争の問題を正面から扱うようになったのか。この論点を、花森の思想的経歴、『暮らしの手帖』の編集方針の変化、時代状況との連関といった複合的な視点から検討する。
- (4) 『暮らしの手帖』の主たる読者層は、明らかに女性であった。「暮らし」をつうじて人びとが新たな主体性を獲得する可能性はとりわけ女性に開かれていると、花森が感じ、考えていたのではないかと。また、花森自身もおかっぱ頭にスカートを穿き、料理やファッションに情熱を傾ける、当時の男性としては明らかにマイナーな位置をとっていた。花森の思想におけるジェンダーおよびセクシュアリティの位置づけを検討する。
- (5) これらの方法をつうじて、花森安治および『暮らしの手帖』というテキストを戦時時期および戦後日本の政治思想史のなかに位置づけることが可能になるとともに、現代民主主義政治理論に、文化史・思想的な視座から貢献することを試みる。

4. 研究成果

ジャーナリスト、編集者、デザイナーと多面的な顔をもつ花森安治のテキストを民主主義思想史の視座から読むことをつうじて、その多様で多面的な活動の基底に、戦時から戦後を経験した文化人としての、政治と民主主義への一貫した関心があること、そのありようが時代状況とともに変化していくこ

とが明らかにされた。とくに以下の点が重要である。

- (1) 花森安治のテキストを戦時期・戦後日本の政治思想の理論的コンテキストで読むと、大政翼賛会の関連機関をつうじて戦時動員の宣伝に携わった戦時期の活動と、『暮しの手帖』などをつうじて「暮し」の重要性を主張する戦後の活動とのあいだには、生活の合理化という点で一貫性があり、ファシズムと民主主義という対立図式を越えて戦時期と戦後の思想史的連続性の文脈で読むことができる。
- (2) 彼が提起した「暮し」の概念を日常性の文化政治という観点から評価すると、花森は一貫して日常生活をつうじてミクロにはたらく「政治」に注目しており、民主主義政治の主体が、ひとびとの無意識化された思考や行動様式をつうじてこそ涵養される必要があることを主張していた。そしてこの日常性の政治への関心は、花森自身の戦時動員体制への参与とその「反省」から生じたものであることが明らかにされた。
- (3) 『暮しの手帖』が扱う生活にかかわる多様な主題 衣裳、食、住居、職業、商品テストなどは、花森にとっては「政治」の重要な要素であり、『暮しの手帖』は彼にとって政治の現場であった。戦時中に携わった宣伝技術を、異なる目的のために『暮しの手帖』に応用したといえる。1950年代以降の『暮しの手帖』の成功（購読者の激増）は、花森のこうした文化政治戦略の成功であった。花森はこうした「暮し」の合理化をつうじた政治社会意識の構築をとくに女性に期待していた。
- (4) しかし、1960年代以降高度経済成長にともなう急激な社会変容の帰結が明らかになるにつれて、花森はむしろ戦後社会への批判的認識をつよめていった。その理由は、高度経済成長にともなう生活の保守化が、花森にとっては戦争を招いた戦前の思考様式（「ちゃんまげ野郎」）の現代版として理解されたからである。
- (5) そうした関心から、1960年代後半以降、彼は現代の国家と資本主義への辛辣な批判を展開し、戦争中の経験と記憶の掘り起こしにも取り組んだ。また、公害、食品添加物問題、環境問題をつよく憂慮した。
- (6) 以上の特徴をもつ花森の「暮し」の概念構制は、彼自身の意図をこえて、民主主義思想と文化政治の理論の点で、2010年代のポスト 3.11 の日本社会を批判的に

理解するうえで重要な示唆を含んでいることが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- (1) 葛西弘隆「ポスト 3.11 の丸山眞男『原子力戦争』の現在」、査読無、『現代思想』2014年8月増刊号、220-227頁。
- (2) ギャヴィン・ウォーカー「現代資本主義における『民族問題』の回帰 ポスト・コロニアル研究の新たな政治的動向」（翻訳）葛西弘隆訳、『思想』2012年7月号、122-147頁。

〔学会発表〕（計11件）

- (1) 葛西弘隆「Culture in Negotiation—平野克弥『対話的想像力の政治—初期近代日本の権力と民衆文化』によせて」、「文化と記憶のポリティクス」国際会議、2014年12月22日、東京外国語大学、東京。
- (2) Hiroataka Kasai, "The Future of Futurity: For the Post -3.11 Political Imagination," UCLA Trans-Pacific Symposium: A New Horizon of Knowledge after 9.11 and 3.11, Co-organized with Prof. Katsuya Hirano, May 28 2014, USA.
- (3) Hiroataka Kasai, Panel Chair and Commentator, "Japanese Imperial Power and Its Limit Cases," Association for Asian Studies, 2014 Annual Conference in Philadelphia, March 28 2014, USA.
- (4) Hiroataka Kasai, "Hanamori Yasuji & the Politics of Everyday Life in Postwar Democracy," A Workshop with Prof. Hiroataka Kasai, Terasaki Center for Japanese Studies, University of California Los Angeles, February 11 2014, USA.
- (5) Hiroataka Kasai, "Hanamori Yasuji and the Question of Everyday Life in Postwar Democracy," East Asia Program, Cornell University, November 19 2013, USA.
- (6) Hiroataka Kasai, "Reading Hanamori Yasuji after 3.11: Cultural Politics and Democracy," East Asia Program-GSSC, Cornell University, October 29 2013, USA.

- (7) Hiroataka Kasai, "Subjectivity and Transnationalism: Nakai Masakazu's Conception of 'World Culture,'" "Transnationalism and Minority Cultures" Conference, The University of Oklahoma, September 28 2013, USA.
- (8) Hiroataka Kasai, "Comments on Ellie Choi's paper," Workshop: Was Taisho Liberalism Applicable to China and Korea?, April 18 2013, Cornell University, USA.
- (9) 葛西弘隆「知識と民主主義 花森安治と『暮しの手帖』の文化政治」, TAC 図書館交流会、2012年11月16日、津田塾大学、東京。
- (10) Hiroataka Kasai, Discussant, "Reconsidering Liberalism in Wartime Japan," March 18 2012, Association for Asian Studies, 2012 Annual meeting in Toronto, Canada.
- (11) Hiroataka Kasai, "The Question of Subjectivity: Early Postwar and Beyond: On Victor Koschmann's *Revolution and Subjectivity* in Postwar Japan," The 5th Conference: Rewriting Modern and Contemporary Intellectual History, October 21 2011, Cornell University, USA.

〔図書〕(計1件)

- (1) J・ヴィクター・コシュマン『戦後日本における民主主義革命と主体性』(訳書)葛西弘隆訳、平凡社、2011年。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葛西 弘隆 (KASAI, Hiroataka)
 津田塾大学学芸学部国際関係学科・教授
 研究者番号：70328037

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：